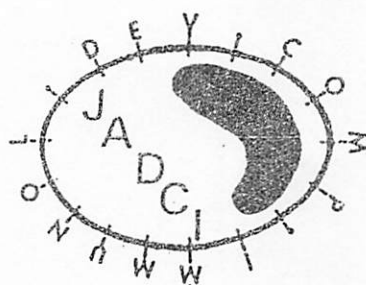


J A D C I News

NO. 6

1993.2.9



The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

Office: Department of Anatomy, Dokkyo
University School of Medicine, Mibu,
Tochigi 321-02

酉年に思うこと

村松 繁

今年の干支は酉である。酉というとサンズイ偏をつけると酒になるということ、亡父も弟も酉年だという個人的なことや、みじめだった敗戦の昭和20年が酉年だったことなど、あれこれ頭の中に浮かんで来る。酉を鶏におきかえれば、昔の鶏肉（かしわ）はなぜあんなにうまかったんだろう、というようなことまで連想してしまう。

こんなとりとめのないことばかりを書いているにしてもJADCIニュースの年頭雑感（古田先生のきつい命令で、仕方なく書いているのです）にはならない。もうやめてしまいたいのであるが、そうもならないので、鶏を比較免疫学にからめて、駄文を綴ることにする。十二支のうち、鶏は比較免疫学と縁が深い。それもそのはず、巳（蛇：爬虫類）と辰（龍：これは何類？、爬虫類かな）以外は、全部哺乳類だからである。

なぜ鶏が比較免疫学に縁が深いかといえば、ファブリキウス嚢（BF）をもっているからである。現在では、免疫学に関心のある人は誰でもBFの役割を知っている。ところが不思議なことに、BFそのものや、それに匹敵する器官は鳥類以外に見つからないのである。ミッシングリンクとは、まさにこういう現象を言うのであろうか。比較しようにも、他類の動物と比較できない謎を秘めているからこそ、BFは比較免疫学的に興味深いのもとも言えよう。

BFは、Hieronymus Fabricius（この人はWilliam Harveyの師であった）という解剖学者によって、400年近く前に記載されたリンパ系器官であるが、その役割は全く不明のままであった。それが明らかになったのには、科学の歴史でよく見られる偶然性がからんでいる。1955年、Ohio大学の大学院生Bruce Glick (1926~) は、いろいろの齢の鶏からBFを抽出した。ところが、健康状態にさした

る変化もないので、もとの籠へ戻しておいた。翌年(?)、同僚の Timothy Chang (1925~) が、それらも含めて多くの鶏に熱不活化ネズミチフス菌を注射して抗体を得ようとしたところ、以前に Glick が孵化12日後にBFを抽出しておいた9羽のうち、6羽は死んでしまい、3羽は抗体を作らなかった。彼らは、今度は意図的な実験を、除糞鶏75羽と対照鶏73羽を用いて行い、対照では63羽が抗体をつくったのに対し、除糞鶏ではポジティブに反応したのはわずか8羽であったという結果を得た。

結果を論文にまとめてScienceに投稿したところ、"Of no general interest"というコメント付きでリジェクトされ、仕方なくPoultry Scienceというマイナーな雑誌で報告したのである。しかし、画期的な仕事は、必ず日の目を見るものであり、数年後には、胸腺の役割の解明や、胸腺とBFの機能分担などの研究課題へと、国際的に広まっていったのである。

酉と比較免疫学を結びつけて書こうと思えば、何かと書けることがわかってホッとしている。残念ながら1956年は酉年ではなく申年である。しかし、申年は私の干支である。私がこの駄文を綴った因縁も全く無いとは言えない。私事に始まり私事に終わる一文を草してしまって、申し譯なく思う。最後に、とってつけたようで恐縮ではあるが、JADCIの今後の発展を祈ると述べて、責を果したい。

第5回 J A D I C 学術集会を引き受けて

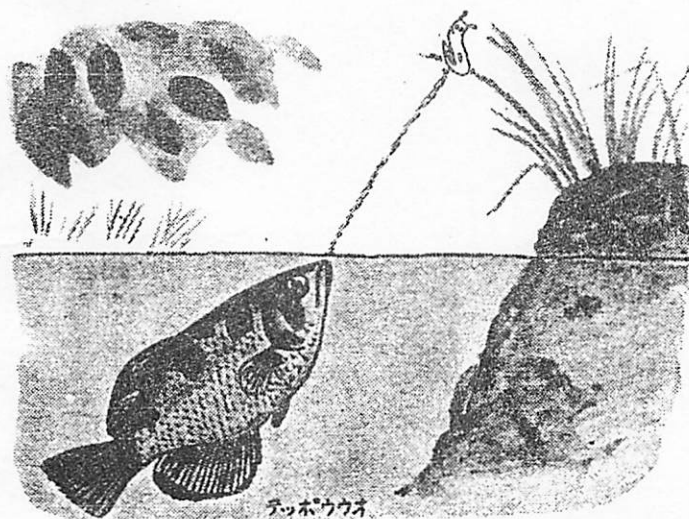
日本大学農獣医学部

渡辺 翼

1993年を迎え、二十世紀も残すところ後8年となりました。今年夏に開かれる学術集会を、私どもの学校でお引き受けする事になり、身の引き締まる思いで新年を迎えました。今までと違って、大学の校舎を使うため、みなさまにご不便をおかけする事を一番おそれております。藤沢市にある本学のキャンパスは、JR藤沢駅から小田急電鉄で3つ目の六会（むつあい）駅から歩いて5分くらいの所にあり、東京、新宿からちょうど1時間位でつきます。最初、付属農場として出発した広々とした敷地で、その後、教養部ができ、1982年に4学科が三軒茶屋から移転して、他の学科も現在移転しつつあります。私が、ここで魚の病気と免疫の仕事をはじめた11年前は、雑木林が生い茂った、野鳥の多いキャンパスだったのですが、その後毎年のように校舎が建ち、今では民家もすぐ側まで迫ってきて、都会的な様相になってきました。大学から7-8キロ南に下りますと湘南江ノ島海岸にでます。あまりにも有名な観光地なので説明のしようもありませんが、夏場はすごい人出です。ただ、学術集会が開かれます8月下旬はクラゲも出ますし、子供達は宿題がたまっていますので、人出はぐっと少なくなる、と期待しています。夏場は、魚たちも子供に海辺を明け渡しますので、海の幸は期待できません。

獨協医大の古田先生とは、もっと前に、我々が海産の無脊椎動物の組織培養の研究チームを組んでいた頃、陸の軟体動物（なめくじ）の組織培養をなさっている先達として、色々教えて頂いて以来の長いつきあいです。私は魚の事しか判らず、苦労していたものですから、古田先生の経験談と励ましの言葉にはずいぶん勇気づけられたものです。そんなこんなで、「渡辺さんとは長い付き合いよねー」と、語尾をのばされると、なめくじに射竦められた蛇のように、今

年の学術集会を引き受ける事になりました。比較免疫学会は、どちらかと云うと無脊椎動物の方が面白く、私などには非常に勉強になります。魚の免疫は、今の所、哺乳類の後追いが多いのですが、私の研究室の森友君をはじめとして、若い研究者が育ってきておりますので、魚特有の、そして、人の免疫学にも貢献できる面白い研究が出てくるよう努力中です、ご期待下さい。もっともっと幅広い面白い学会にしたいものです。何はともあれ、今年の夏は精いっぱいやりますので、ぜひ、遊び方々、ご参加下さい。



第 4 回 学 術 集 会 に 参 加 し て

エーザイ(株) アニメイト事業部

開発室 齊藤 雷太

秋吉台を訪れたのは今回が初めてである。暦の上では秋だが都会ではまだまだ暑い日が続いている。ここ秋吉台は日差しこそ強いものの初秋を思わせる風が心地よい。やや高台にあるホテルから見渡せば、緑の台地に石灰石のごつごつした岩肌が露出し、遠くの山々とは全く違った景観を呈している。夏休みも後僅かということもあって人影はない。そのことがかえって、気の遠くなるような太古の昔から生き続けている大自然の息遣いを一層際立たせる。

バブル崩壊の影響で会社の経費が切り詰められているときだけに本会への出席を躊躇したが、都会では味わえないこの大自然を前にしてみるとやはり参加してよかったと思う。このような風光明媚な場所で学術集会が開催されるのは初めてのことである。そもそも私

が日本比較免疫学会の会員になったきっかけは11月末のある日のこと。その日突然、私の職場を現会員でいらっしゃる高知大学の楠田先生と元宮崎大学の北尾先生が次々にご訪問になられ、本学会の存在を教えてくださいましたことに端を発する。学会の存在と第1回学術集会がその日自社（エーザイ本社ホール）において開催されることすら知らなかったことに恥じ入るばかりであったが、同席した事業部長からの強い勧めもあって会員になった次第である。それ以来のお付き合いである。

ところで、今回の学術集会に参加しての感想を一つ二つ述べてみたい。第一に、会員数少ないせいなのか、はたまたざっくばらんな先生方が多いせいなのか、学会全体の雰囲気非常に明るくしかもアットホーム的な印象を与えるところである。すなわち、会員同士がそれぞれの持論やアイデアを自由にぶつけ合って闊達に討論する雰囲気が他の学会に比べて多く残っているように思われる。

何でも自由に話し合える明るい家庭とでもいえようか。それに相手を敬う節度もあり、理想的な家庭に喩えられよう。今後ともこのような良き雰囲気さをさらに醸成されて、会員の皆様の研究成果向上に寄与できる場であってほしいと思う。第二に、懇親会に今回初めて参加して驚いたことは、いかに大酒飲みの方が多いかということである。私も嫌いな方ではないので、ついつい夜更かしして飲み過ぎ、翌日の研究発表が子守歌に聞こえる場面も度々。免疫については免疫のない（素人の）私にとっては、毎晩のアルコールで脳細胞が破壊されていく中で、発表内容を理解することは至難の技であったことだけは確かである。しかし、発表内容を何とか理解しようと努力したことに免じて発表者へのご無礼をお許しいただければ幸いである。

ホテルに監禁されて鍾乳洞などの観光ができなかったのが心残りではあるが、帰社後、同室だった先生方からご紹介いただいた免疫

に 関 す る 書 物 の 中 か ら 手 始 め に と 思 い 、 『 無
脊 椎 動 物 の 生 体 防 御 機 構 』 を 購 入 し て 勉 強 を
始 め よ う と し た が 、 毎 日 の 仕 事 に 追 わ れ て な
か な か 思 う よ う に 進 ま な い 現 実 に 悩 む 昨 今 で
あ る 。 畜 ・ 水 産 動 物 の 病 気 に 対 す る 予 防 薬 や
治 療 薬 の 開 発 を 担 当 す る 私 に と っ て 、 日 本 比
較 免 疫 学 会 の 研 究 成 果 が い ろ い ろ な ヒ ン ト に
な れ ば と の 思 い か ら 、 今 後 と も 学 術 集 会 に 積
極 的 に 参 加 し て い き た い と 思 う 。

最 後 に 、 会 員 の 皆 様 の ご 指 導 ・ ご 支 援 を お
願 い 申 し 上 げ ま す と と も に 、 日 本 比 較 免 疫 学
会 の 益 々 の ご 発 展 と 会 員 の 皆 様 の ご 活 躍 を 心
よ り お 祈 り 申 し 上 げ ま す 。

冬虫のなげき

今年の冬は、お天気相談所の話ですと”暖冬でございます。”そうですが、連日冷たい雨が続いたり、3月下旬の暖かさになったりで、私の様に”寒暖自在”でない人間は、調子をくずし頭の中まで変調をきたしてしまいました。

この所、当大学では、停年退任教授が多くしたがって飲む機会も増えて、その分プラスに働いて、ますますどこもかしこも変調をきたして困っております。

さて、新年早々に”JADCI News”を出すことになっておりましたが、どういう訳でございましょうか、約1名の方からの原稿がいまだとどきません。そこで仕方なく見切り発車させていただき、次号に間に合わせていただくことと致しました。きっと楽しい原稿がとどくことと期待しております。

雑誌社の編集室にいる人々の原稿催促の時のやるせない気持ちがよくわかるようなこの頃です。

さて、冬虫はなげいているのでしょうか、そうです。歎いているのです。勝手に背中にカビ (*Cordyceps sinensis*) が寄生し、夏になるとニョキニョキのびて、高価な強壯剤にされてしまうのですから、歎かずにはられません。

いまはムシの私ですが、夏になると頭から長い草がはえて来ることでしょう。その草が私自身にたいして強壯剤として働いてくれることを祈りながら、この季節を何とかやりすごして生きて行きたいものと思っております。

平成5年2月2日

獨協医科大学

第Ⅱ解剖学教室

JADCI事務局

古田 恵美子

日本比較免疫学会第4回総会議事録

日時：1992年8月26日

会場：秋吉台 グランドホテル

出席者：50名（欠席役員：野本亀久雄、栃内 新）

会長挨拶（村松 繁）

開会挨拶の後、議題の内容を簡単に説明した。

審議事項

I) 会計報告（古田 恵美子）

平成3年度の収支決算を説明し、会計監査役員の渡辺 浩先生が監査結果を簡潔に報告された。議長が会員に審議をお願いし、会計報告および会計監査の結果は満場一致で承認された。

尚、古田 庶務・会計役員より現時点で207名の年会費未納者がいるとの報告があり、これを受けて村松 会長が学会規則に則り、2年以上滞納している者に庶務側から然るべき通知をし、その後会則に則って除名したいとの意見が出された。

II) 次期学術集会の会長の件（村松 繁）

役員会は来年の学術集会会長を日本大学・農獣医学部の和気 朗氏にお願いしたい旨の提案がなされ、満場一致で承認された。尚、和気氏が欠席のため、同大学の渡辺 翼氏が代わって挨拶し、1993年度は神奈川県藤沢市の農獣医学部キャンパスで8月25、26、27日の2日間を予定しているとの話がなされた。次次期学術集会は北里大学・水産学部の神谷 久男氏が会長に予定されており、3年後の学術集会は高知大学・農学部の楠田理一氏が会長を引き受けられる予定であるとの報告があり、満場一致で承認された。

報告事項

I) Abstractに関して（友永 進）

昨年学術集会のAbstractは、非常に遅くなったがVol.16(5)のDevelopmental and Comparative Immunologyに掲載される予定であること、またこの掲載にあたって査読をお願いした会員の方々に感謝が述べられた。